

友
達

その子供はおずおずと作業場の中にはいると、棚に並べてある私の手製の自動車模型に見入っている様子だった。さらにその子供の関心は壁に移つていった。様々な工具と作業台の上の小さな金属加工機械に移つていった。

「君、名前はなんていうの。おじさんは斉藤修だ」

「迫田隆一です」

「隆一君、君は小学生かい？」

「小学校四年です。あの、教えてほしいことがあるんですけど」

「なんだい？」

「あの自動車の模型、どこで売っているんですか。プラモデル屋さんにもおもちや屋さんにも、探したけれど売っていないんです」

「彼が誤解したのも無理はない。」

「プラモデルじゃないんだ。試しに持って来てみてごらん」

彼は窓辺に置いてあったクラシックカーの模型を持ち上げてみて、驚いた様子だった。

「重たいや」

「本物の自動車と同じ材料でできているんだ。同じ模型は他にはないんだよ」

「じゃあ、おじさんがひとつずつ作っているんですか」

「そうだよ。あそこにあるいろいろな道具を使って材料から作って

いるんだ。ハンドルもドアも本物と違わない仕組みで動くんだ。それにこうやってボンネットの中を見てごらん」

「わあ」込み入った部品からできてくるエンジンルームを見てその子供は感心しているようだ。

「これ、エンジンは横置きなんですか」

「私はその質問にやや驚いた。この子はある程度自動車の知識があるようだ。」

「そうだね。これは本物と同じ作り方をしているからね。それにそのエンジンにはね、見えないところまでこんな風に全部本物と同じ仕組みに作ってあるんだ」

作業台の上にある、部品をすりあわせて調整している途中のエンジンの模型を指で示した。

「すごいなあ」

私は資料と設計図面を取り出してテーブルの上にひろげた。

「こうやって写真や図面を集めてどういう風にするか決めてから、どういう順番で作るか考えてひとつずつ部品を作っていくんだ」

実際には資料だけではどうしてもわからないことのほうが多くて、各地に足を運んで実物を見てから設計図を書くということが多い。は言わなかった。子供を相手に自慢話をするようなことは馬鹿げている。

「これ、走りますか」
「さあどうだろう。簡単な仕組みの自動車の模型なら、燃料を入れ
たら走るかもしれないけれど、こんな小さな自動車を運転する人な
んていないからね」
「電池じゃないんですか」
「本物の自動車は普通は電池では動かないだろ。電池で動く本物の
自動車もあるらしいけれど、この模型の本物はガソリンで動くから
ね。本物通りに作ると電池もモーターも入れる場所がないんだ」
彼はしばらくのあいだその模型をいろいろな角度から眺めて感心
していた様子だった。
「隆一君、学校のカバン持ったままだね。ひょっとして帰り道で道
草しているのかな」
「あ、そうだ。早く帰らないとママにしかられる」
「それじゃ気をつけてお帰り」
ドアから出ていこうとして彼が振り返った。
「あの、おじさん、また来ていいですか。模型の好きな友達がいる
んです」
「いつでも来なさい。おじさんの仕事のじゃまにならなければお友
達も連れてくればいい」
「ありがとうございます」

少年は走り去っていった。彼のちよつと窮屈なまでの礼儀正しいもの言い方に、最近の子供というのはいさゝか、中断していた作業に取りかかると、私は感じた。コ―ヒ―を飲んで一息入れてから、注文で、彼女の夫がアフリカで行われたラリ―で遭難したときに、最後に乗っていた自動車の模型を作ってくれというのだった。外国の自動車メーカーから時たま宣伝用に模型を作った。その女性が来日したときに、個人からの注文というのは珍しかった。その女性が来日したときに、彼女の知り合いがまた持っている私の作った自動車模型を見て、これはどううしてもそのような模型がほしいと考えたということだった。機械仕掛けの自動車の模型で、最近の電子制御を中心としたメカニズムのものあまり好きではない。形だけまねても金属部品のように実際に動くわけではない。しかし今回は彼女の夫が最後に乗った車ということではないことがある。入れを尊重して仕事を引き受けた。その模型を作るのに、特殊な部品を作る必要があつてわざわざそのための工具を工場に頼んで作ってもらった。最初からその部品を作ってもらえば楽なのだ。ところが、そういうやり方は私の好まないや

り方だ。
彼女からは設計図やラリーで使われたときの様々な角度からの写真などの資料が送られてきた。その点では情報は十分あったが、真加工の板金加工をしなければならぬのは同じことだ。重要なのはラリーの車には様々なメーカーの名のレッテルやゼッケンが張られるという用意しなければならぬ。タイヤも同じでメーカー名の大量に用意しなければならぬ。タイヤも同じでメーカー名の合いで模型のサイズばかり集めている人（そういう人もいる）から譲ってもらった。最終的な仕上げの段階になっていた。部品の若干の修正と仕上げと組立の作業が残っている。車体の塗装は白い色だった。そのヨーロッパ車の白の感じがつかめなくて同じ車の量産車を取り扱っているメーカーを訪ねて実物を見せられた。依頼主を通じてその車のメイカーから紹介状をもらって、それを快く応じてもらえた。ただし実物の色がわからなかったからといって、それをそのまま使えばいいというものではない。模型と実物の大きさの違いを考えてそれらしく見えるためには、微調整をしなければならぬ。実物そのままだと、同じことが見える。本革の座席だからといって、模型

にそのままの革を使ってしまおうと全く違った印象のものになってしまった。模型の大きさをそれらしく見えるようにするたけには別のもの、時には思いも寄らないものがかかって本物の印象に近くなる。今回の仕事にはこれまでおよそ三ヶ月かかっている。顔が合わさることはこれ物扱いで航空便で送る。依頼主とは今回は顔を合わせれば、そしてそれを機会もなかった。私の作ったもので私の心が伝わるのになつてくれればと願うだけだ。夫の形見とも言えるようなもの。だから最近仕方なく新しい注文は断ることになっている。

日曜日、作業場の掃除と整理をしていると、迫田少年が友達を三人つれてやってきた。

「ごめんください」

「やあいらっしやい。お友達も一緒だね」

「自動車の模型見せてもらえますか」

「その棚にあるものならどれでもいいから出してごらん。重いから気をつけなさい」

子供たちは模型を手にとって、みんなその重さに驚いたようだった。迫田少年は、どれも本物と同じに動くんだ、エンジンの中まで

本物と同じなんだと、まるで自分で作ったかのように熱心に説明していた。クラッシュクカーが好きな子供もいれば、比較的最近のスポーツカーが気に入った子供もいた。その中の一人が私に尋ねた。

「これ全部、おじさんが作ったんですか」

「どうやったらおじさんみたいに上手に作れるようになるんですか」
これは難しい質問だ。私は少し考えた。

「好きなことだから一生懸命やる、そういうことかな。それにおじさんのお父さんは工場を持っていてそこでいろいろなものを作るのを小さい頃から見ていたから、それで好きになったということもあるかもしれない」

その工場も今はなく、父もいない。

「あ。飛行機の模型だ」

子供の一人が棚の上の方にひとつだけあった旧日本軍の戦闘機の模型を見つけた。

「ああこれだね」

私は手を伸ばしてそれを下に降ろした。

「かっこいいや」

「他にはないのかな」

「飛行機はそれだけだね。おじさんは自動車のほうが好きなんだ」

その模型は父の形見だ。作った者の思いがどんなに込められたものでも、戦争の道具は好きになれないという説明は不要だと考えた。

「隆一君に、この模型は動かないのかと聞かれて思い出したんだ。ひとつだけ動くものがある」

私は棚の奥にある、かなり昔に作った小さい蒸気自動車を取り出した。久しぶりに取り出して整備をしておいたものだ。

「いいかい。見ててごらん。ここに水を入れてふたをして、こちらのアルコールランプに火をつけるんだ」

子供たちが固唾をのんでみていた。しばらく立つと水温が上がって蒸気が吹き始めた。

「この栓を調節して、このレバーを倒す」

何年ぶりかでその蒸気自動車がゆっくりと動き始めた。

「わあ。動いた」

子供たちが喝采をあげた

「蒸気圧だ」

「よく知っているね。むかしは蒸気で動く自動車もあったんだよ」

「これもおじさんが作ったんですか」

「ああ、そうだよ」

「すごい」

蒸気自動車はゆっくりと部屋の中を何周かしたあとやがて止まっ

「た。
「すごいなあ。おじさんみたいになりたい」

子供にむやみにおかしな期待を持たせてはまずいと思って、慎重に言葉を選んだ。

「世の中にはね、おじさんなんかよりもっとちゃんとしたことをしている人がたくさんいるんだ。君たちのお父さんやお母さんがそうかも知れない。ものを作るといいうのはとってもいいことなんだよ。このごろのおもちゃは組み立てて電池を入れたらすぐに動くけれど、自分で考えてものを作るのはとても楽しいことなんだ」

子供たちは私の心配をよそに、無邪気に自動車の模型で遊んでいた。
「そうだ、隆一君。君たちにならこれは作れるんじゃないかな」

私は作業の前にいつも試作する紙製のモックアップを取り出した。

「おじさんはいつも模型を作るときに、それと同じものを紙で作っているいろいろなことを確かめてみるんだ」

子供たちは興味深そうにそれを眺めていた。

「これ、紙？」

「すごいなあ」

「これはちよつとむずかしいけれど、もう少し簡単なものなら君た

ちに作れるだろ。学校や塾のじゃまにならないなら、この次までに材料を用意しておいてあげようか」

「はい。お願いします」

迫田少年が、また行儀張った言い方で返事した。

「それとね、おじさんのうちに来るときにはちゃんと家のひとに話してから来るんだよ」

「はいわかりました」

「それじゃ、気をつけて帰りなさい」

「はい。おじさん、さようなら」

「さようなら」

私は子供たちを見送ってから、小学校四年生にも比較的楽に作れて、それでいて完成したものを見てある程度驚いて感動できるようなものは、どのようなものだろうかと考えてから、試みに図面を引き始めた。

次の模型を作るための資料集めと、どこにも売れるはずのない小説の原稿を書く毎日が続いて、また日曜日がやってきた。

私は切り抜いてのりしろを貼り合わせれば自動車の形になる型紙を用意してきた。子供たちが来るのを待っていた。昼過ぎに子供たちがやってくる。人数が二人増えて六人になって、その中の一人は女の

子だ。私は六人の子供が作業するには部屋が狭くはないか、は
さみは足りているだろうかと心配になった。何人かはさみを持た
し、きていた。部屋が狭いのは仕方がないので奥の居間にも子供た
ちを入れた。
「それじゃみんな自分の好きな色を選びなさい。一緒になっちゃた
らじゃんけん決めてなさい」
ある程度考えていたとおりの色を選ぶ子が多かった。
「太い線の通りに切り抜いて、赤のりを付けるところは定規を当てて
折り曲げるんだよ。そう。折りを曲げるところには定規を当てて紙に
折り目をつけるんだ。のりを付ける前に一度どんな形になるのか紙
を合わせて確かめてごらん。それから薄くのりを付けて少し待つて
から貼り合わせるんだ。のりがはみ出たら少し乾かしてからまた別の
紙があるから」
私はいま手を出さず、子供たちが試行錯誤して作り方を自分で
学ぼうと見守った。どうしてもうまくできない子には自分で本
を見せようからもう一度やらせた。輪ゴムと洗濯ばさみで押さえての
りが乾くのを待つ間、初めてきた子供に前から知っている子供が私
の作った模型について説明をしていった。ジュースとクッキーを出してやった。

「それじゃあもうそろそろ輪ゴムと洗濯ばさみをはずしてみようか。そつととるんだよ」

テーブルの上に六台の手のひらに乗るような大きさのヨーロッパ製の自動車の行列ができあがった。

「わあ」

子供たちが歓声を上げた。自分たちが予想もしなかったきれいな自動車ができて驚いている様子だった。私は子供たちが喜んでくれただけで十分満足した。

「それじゃあ残ったゴミはこの箱の中に入れて、はさみを忘れないように持って帰るんだよ。模型は壊さないように大事にしなさい」

「おじさんありがとう」

「おじさんさようなら」

私のようなものでもこういう形で世間の役に立てるのだなと、うぬぼれかも知れないがなぜかほつとした気持ちだった。

その翌日、町内の婦人が二人相次いで訪れた。私は出しゃばったまねをしたかと気になったが、二人ともその前日我が家の模型を作ったこととでたいそう喜んでいたので話だった。一人はあんなに不器用な子供が初めてちゃんとしたことができた、まるで泣き出さんばかりの様子だった。私は子供たちに喜んでもらうのが楽しみで自分が好きでやっただけのことなのだと言明したが、二人

ともずいぶんと喜んでいた。お礼の気持ちでありがたくちようだいした。子を持参してきたが、断るのも失礼なので

いつの間にか日曜日になると私の家は子供たちの工作教室のようになつていた。私はその子供たちの活気に接している。そこがむしろ大切なことだ。私の生活に欠けている生命がそこにみなぎつていた。家が狭いので子供たちを呼ぶのは六人までが限界だった。やうにうちにみんなそれなりにうまくなつて、器用な子供にはある程度複雑な曲線の工作を試させてみて、といても出来ない。ものを作る途中の喜びを感じさせることが大切なのだ。うと素人なりに考えた。時々普段来ている子供が来なくて、初めて見る子がまじつて、こともあつた。聞いてみると、私の家で工作の話が子供たちの間で話題になつていて、どうしても一度やりたいという子がいると、大勢で行くことはできないからという理由で、その時だけ誰かが休むというルールができていた。初めての子供はそれなりに作り方を備わつていようだ。初めの子供には迫田少年が模型の作り方を

教えた。初めに模型を作ったときからしばらくたつて子供たちの模型づくりが目に覚え上手になつてきたとき、迫田少年が棚に並んでおられる模型の自動車の一を指さしてこれに模型で作れないだろうかと言つた。すると他の子供たちもそれぞれ自分はこの自動車を作つてみたいと言ひ出した。その中には紙という平面から作ることもないかと思ひ、子供もあつた。しかし私はできるだけ限りの範囲で子供ひとりひとり思ひの希望を聞き入れて、週におよそひとつづつ模型の紙を作つていつた。それは時には努力や工夫を要する作業になつたが、やりがいのある仕事だつた。子供たちはこの『宿題』を通じて私にさやかな生きがいを与えてくれていたのだ。

何かを勘違いしたのか、時たま親が訪ねてきて、私の『塾』に入るにはどうすればいいのかなどと質問された。これは『塾』ではなく子供たちが好きで遊んでゐるのを手伝つていただけなのだと説明してもなかなか納得して貰えないこともあつた。とはいつても明したもなかなか納得たこともない責任の元で子供たちが何か私へたと善意でしたことでも自分の責任の元で子供たちが何かをしてくれなるときにはさみやカッターナイフなどでけがをしたら大変な問題になるので、そういう種類の保険に入つていた。その掛け金を

を支払うに値するだけのものを私は子供たちから得ているのだから
それでいいのだと考えた。

ある日私が作業場で次の模型の設計図を書いているとき、比較的
若い男性が訪ねてきた。自分からこの学区の小学校の教師だと名乗
った。私は彼を居間に招いた。

「学校の中で斉藤さんのお宅での工作のことが話題になっていまし
て、中には自分が作ったものを学校に持ってきて自慢する子供もい
ます」

「それはまずいことでしたか。何か子供たちの間で不公平になるこ
とがあるとしたら私に責任がある」

「いえ。そういう問題ではないんです。確かに学校におもちゃを持
ってくることは認めていないのですが、美術担当の教師にいわせる
と、おもちゃであるかどうかという問題よりも、できあがったもの
にセンスがあるというのです。子供にそういう才能があるのを見抜
くのも子供にそういうものを作らせるのも、相当の人でないとき
ることはないとはいえませんが、これは一度おじやましてお話を伺
おうかと思つて参りました。拝見してみてもわかりました。私も子供
の頃プラモデルに熱中していたことがありまして、一応ものの善し
悪しはある程度分かるつもりではおりますが」

「恐縮です。私は教えるということについては根っからの素人で、ただ子供たちに喜んでもらいたいというだけでやっていますことなんです」

「そういうことが本職の教師にかえって欠けていることなんでしょうねえ」

若い教師はため息混じりにそう言った。

「実は斉藤さんにお願ひがあります」

「私がおかお役に立てることがありますか」

「ここに来る途中で考えていたことなんです、この模型を見て決心しました。一度学校に来ていただいで子供たちに教えていただけないでしょうか」

「教えるなんてとんでもない。私にはそんな大それたことはできません。私はただ子供たちの遊びの手伝いをしていただけです」

「ですからその延長というところで何かしていただけたらと思うんです」

「そうですねえ」

私は何か重大な問題を突きつけられているような気がしてならなかった。

「教師生活はたいして長いとは言えないんですが、どうも普段から気になってしかたがないことがあるんですよ。子供の中には利口な

子供もいればそうでない子もいる。器用な子供もいれば不器用な子供もいる。忍耐強い子もいれば飽きっぽい子もいる。それはいい悪いの問題ではなくて子供たち一人一人の個性の問題なんです。自分のしていることは子供の個性をそぎ落としているだけじゃないのか時々思います」

彼は思い詰めたような口調で言った。

私はふと思いついた。「蒸気機関車はどうでしょう」

「はい？と聞いてますと？」

「あれは複雑な形のように見て実は単純な形の組み合わせでできているんです。ああいうものをたとえばクラス全部で協力して分担して作れば、上手な子は上手なりに、不器用な子でもそれなりに参加できる。やり方は自動車の時と同じであらかじめ型紙を作っておいてそれを切り抜いてはりあわせればできあがるようにしておけます。子供たちは何人いますか」

「四年生がクラス三十人で二クラスあります」

「それだと蒸気機関車と燃料車と客車で二編成できますね。午前中いっぱい大体できあがると思いますよ」

「それなら土曜日の課外授業ということでできます」
「じゃあ、そう二週間くらいで型紙は作れるでしょう」

「そこまでお願いしてよろしいんでしょうか」

「なに、私が始めたことで話がここまで大きくなったのなら、私に責任があります。ぜひやらせていただきます」

「ありがとうございます。この際そこまで甘えさせていただきます。必要経費ならば何とでも都合がつかますのでいくらくらでもおっしゃってください」

「いえいえ。紙代だけでいいのです」

「そうですか。では学校にこの話を持ってかえって日取りが決まりましたらあらためて参ります」

「ではご連絡をお待ちしています」

教師を見送ってから、私はあ言ってはみたものの自分の本職を犠牲にしてまでやることなのだろうかと考えた。私が言い出したこととをよく考えてみると実は二週間どころではすまないことなのだ。今作業をしている自動車の模型の納期に影響が出るかも知れない。しかしこれはやはり私がやりだしたことでここまで話が大きくなつてしまったのだから、明らかに私に責任があるのだ。ほんのちよつとしたきっかけで私の家で工作をして遊べる子供と遊べない子供の間に差ができてしまおうとしたらそれはよくないことだ。私は覚悟を決めた。まず小さい模型を自分で作ってみて、どうやれば作業をうまく分担して作れるかを考えることにした

三週間後の土曜日の朝、私は小学校の体育館で約六十人の小学生とクラスの担任と美術の教師を前に、紙製の蒸気機関車の模型を手に持つて立っていた。

「今日はみんながこの蒸気機関車の模型を作ります。みんなが作るのはおじさんが今持っている模型の三倍の大きさ、これくらいの大きさになります」

私が両腕を広げてみせると、子供たちの中からどよめきがわいた。「大丈夫。みんながひとりひとりちゃんとするれば、お昼頃にはできあがっています。わからなことがあったら先生とおじさんに聞いてください。心配しないでがんばりましょうね」

教師にはあらかじめ模型を作る手順を教えてあって、子供たちの誰に何をやらせるのかを考えてもらってあった。私には子供にどの程度の能力があつてどこまでが限界なのかさっぱり見当がつかない。子供の誰もが模型を作ることが好きなわけではないのだ。何か私の思い違いがあるのかも知れないと不安になった。

子供たちが体育館の床に広げた新聞紙の上で工作を始めた。体育館の中は活気にあふれていた。小さい模型を見ながら、自分が作るのほどの部分なんだろうかと考えている子もいれば、とにかくまず切り抜いてみようとする子もいた。作業が進むに従ってあちらこちら

らで、この部品は前だとかいや後ろだとか、これは右側につけるのか左側につけるのかどちらなのだと議論が活発になった。私の出る幕もなく担当がうまく誘導している様子だった。客車を作っているグループは、形が単純なこともあって比較的穏やかに作業が進んでいる様だった。ちよつとのぞいてみると、客車の窓に乗客の絵を描いている子がいた。

「これは誰なの？」

「これがみつちゃん、これがあやちゃん、それにこれがあたしです」
「仲良しなんだね」

その隣では色紙をはさみで花びらの形に切って車体の側面に貼りつけている子供もいた。教師は子供たちひとりひとりの個性を考え、役割を与えている様子だった。

途中で二十分の休憩をはさんだが、休憩時間の間も作業を続けている子供がいた。見ると迫田少年だった。彼はおそらくいちばんむずかしい機関車の車輪まわりに取り組んでいる。根っから好きでないとできることはない。

後半になって次第に完成に近い形が現れてくると、ある種の興奮がわいてくる様子だった。しかしそれぞれに作った部品を最後に組み合わせる段階では、やはりある程度大人の力が必要なようだった。試作品の小さい模型はいくつかの部分に分解することができて、そ

れぞれに記号を入れてどこを合わせればいいのかがるよ
うにしておいた。それぞれの部品は別が付きやすいように色の違
う紙を使っておいた。完成したものはとてもカラフルになるはずだ。
それができる限り最小限の範囲にはむずかしいことになった。教
師たちはできる限り最小限の範囲で生徒に助言を与えた。
の間から大歓声がわいた。多少ゆがんでいても不揃いでもかまわな
いのだ。子供たちみんなの努力と個性の集大成なのだ。
生徒の一人が、機関車に名前を付けようと提案した。いろいろと
口々に言っていたが、結局極めて普通の、四年一組号と四年二組号
という名前になった。名前のプレートがそれぞれの機関車の前面に
貼りつけられた。教師と生徒全員が列車の模型を前にして記念写真
を撮った。
「みんなとてもよくできました」
私はそれだけ言った。おそらく初めてみんなで協力してひとつの
ことをやり遂げたのだ。これから先の人生ではそんなことは二度と
起こらないのだなどと、子供の希望の芽を摘むようなことは間違っ
ても口にしてはならないと考えた。
子供たちが列車を学校の玄関に運ぶのを見送ってから、私は教師

に挨拶をしてそつとその場を離れた。

翌日の日曜日、またいつものように子供たちが私の家に集まってきた。私は子供たちに、これからは告げた。時々寄ってもかまわないが、おじさんは仕事をしなければいけないのだ。子供たちは残念そうだったが、私の大人としての事情もわかってもらえた。宿題というこの次（い）つのことになるかはわからないが、までの宿題ということとでみんなに型紙を渡した。課題は自動車が好きで塗ること。その宿題の結果をいまだに見ることができない。

子供たちが帰ったあとで、迫田少年があわてた様子でもどつてきた。

「忘れ物かい？」

「いえ。違うんです。前から気になっていただけ。この車」

彼はそれだけアクリル板のケースに入っているT型フォードの模型を指さした。

「それかい？ T型フォードといって世界で初めて大量生産された自動車なんだ。それまで自動車はお金持ちのものだったのが普通の人も買えるようになったんだ」

「どうしてこれだけ透明の箱に入っているんですか」

「おじさんが最初に作った模型だからだよ」

「迫田少年はその模型をじっと見つめていた。」

「気にいったんらあげようか」

「え？いいんですか？」

「大事にしてくれるって約束したらあげるよ」

「はい。でも本当にいいんですか」

「大切にしておくれよ。図面もここにあるから、よかったら持って

いきなさい」

「ありがとうございます」

迫田少年は深々と頭を下げ、箱ごと大事に抱えて持って帰っていった。

その一週間後の夜、私が作業場で紙製のモックアップを作っていると来客があった。ドアを開けてみると私よりひとまわりほど若いと思われる婦人が立っていた。

「お忙しいところをおじゃまいたします。私、迫田隆一の母でござ

います」

「これは初めまして。玄関先ではおさむいでしょうからどうぞ中にお入りください」

私は迫田夫人を居間に案内した。
「男一人の住まいなもので散らかりがちで申し訳ありません。で、今日は何か特別のご用件でも？」
「実は隆一がちょうどいいと思った自動車の模型のことなんです」
「あれですか。あれは隆一君が関心があつて、彼なら大事にしてくれると思つたんでそれで差し上げたんですが、何か失礼なことになりましたか」
私は何が問題なのかよくわからなかつた。
「はい。実は私の夫は自動車会社に勤めておりまして、夫が隆一の持つてかえつたあの模型に興味を持ちまして、隆一から借りて会社に持つていったんです」
「自動車会社ですか」
「はい。そうしましたら会社の中に自動車の模型のことに詳しいかたがいらっしゃつて、斉藤さんというお名前の自動車模型の作者なら関係者の間では有名で、世界でも一流で通つていて、自動車の模型といつても本物の自動車よりも値段が高くなることもあるくらい値打ちのものだと聞かされました、夫も驚きましたしその話を聞いた私も驚きました」
これはまずいことをしたと思つた。迫田少年を相手に物事を考へていたので、そのような素朴な愛着とは別の次元で私の作つた自動

車模型を見ている世界があるのだということにうっかり気が回らなかつた。

「夫が家に持ち帰りましてから、どうしたものかと夫と二人で考えておりました。会社の社長にまで話が届きまして、社長さんのいうには、斉藤さんのT型フォードの模型ならいくらでも金を出すから譲れ、というお話で、隆一がいたのだものを取り上げるわけにもいかず、これはもうお返しするしかないと思つて参つた次第です」

「いや、それは私のほうがかつて見れば小学生に本物の自動車を与えるようになったことをしてしまいました。申し訳ありません」

「隆一がこの町の学校に転校してきましてこちらにうかがうようになりまして、それまではとても無口な子だったのが、すっかり快活になりまして夫と自動車のことをよく話すようになりまして、これはきつといいお友達ができたのだとばかり決めつけておりました。私の不注意です」

「ではこういふことにしませんか。その模型は作者の斉藤から訳が あつて隆一君が当分の間預かっているだけなのだということにしま せんか」

「それでよろしいんでしようか」

「作者本人がそう言っているのだといえれば社長さんも納得するでしょう。私のご主人の会社での立場がなくなるということもないでしよう。私の名前はそれくらいには通用します。隆一君が大人になつて物事の善し悪しや世間のものを見方というものがわかるようになる。隆一君に決めたその時にその模型は誰が持っているのがいちばんいいのか。それだとずいぶんと先のことになりませんか。本当によろしいんですか。」

「一番大事にしてくれる人の手元にあつたほうが模型も幸せというもんです。」

「せっかくいたいたもの勝手にすることを言ひまして申し訳ありません。失礼とは思いますがお詫びのしるしと思つて受け取つていただけますか。」

迫田夫人が菓子折を出した。

「これはすみません。本当なら私の方がお詫びをしなければいけないんですが、これはお気持ちということでちようだいいたします。」

迫田夫人は玄関先で何度も頭を下げてから立ち去つた。迫田一家にすまないことをしたと思つた。私の作つた模型ひとつで命のやりとりをするような人もいたのだというのを忘れていた。私はこの借りをどうやってかえせばいいのか考へた。

しかし借り返すなどという余裕もなく、十数年ぶりに思いがけず病がぶり返して入院することになってしまった。すっかり治っていったと思っていたのがどうやらどこかで隠れて出番を待っていたよ
うだ。この数か月の充実した日々は病と引き替えのものだったの
かもしれない。以前のような体力はもはやないから、今度の入院は
長引くかも知れないと思った。ことによったらこれがしゃばの見納
めかも知れないと思った。

入院してしばらくたってから、どこをどうやって探し当てたのか、
顔と名前だけ知っている出版社の人間が病院を訪ねてきた。ひよつ
としたらここにきてやつと文筆のほうで世間に認められるのかも知
れないと思つたが、話は違っていた。私が子供たちのために作つた
自動車や蒸気機関車の模型の型紙が学校関係者の間で評判になつ
て、それが教科書会社を通じて出版界に知れ渡り、それを本の形に
して出版するという話が持ち上がったというのだ。

「教育関係だけじゃないんですよ。自動車マニアの間でもうわさが
立っていて、いつ出版されるのかわかるといって来るといって
す。そこらのデザイナーに同じようなことをやらせてみようとして
も猿まねにもならないんです。やはり車のことをちゃんとわかつて
いる斎藤さんだからできるんじゃないかって上の方でも話してま

「す
やれやれ。どうして私の才能というのはいつもこのように違った
方面でばかり評価されるのか。いや。これはきつと私のぜいたくな
悩みなのだろう。世間の人はもつと苦労しているはずだ。何しろ私
はこれで入院の費用を得ることができただ。私の人生はそれなり
に帳尻があっているのだろう。」
装幀はまかせるが紙の質と色の使い方だけには十分注意してもら
いたいと念を押しておいた。あとは買った人が眺めて楽しむなり切
り抜いて模型にして楽しむなり好きなようにすればいい。どんな形
でも世間の役に立てるといふことはいいことだ。
入院して数ヶ月が立って、思いがけない人が見舞いに来た。工作
教室の子供たちだ。
「おじさんこんにちは」
「やあこんにちは。ここがよくわかったね」
「大家さんに聞きました」
「迫田少年が快活に答えた」
「学校はどうしたのかな。休日じゃないだろ」
「春休みです」
「そうか。それじゃあみんなもうすぐ五年生だね」
「はい」

若いというのはいい。まだいくらでも将来がある。

「おじさんにおみやげを持ってきました」

「何かな」

「これです」

迫田少年が袋から出して差し出したものを見て、私は一瞬どきりとした。しかしそれは私の作ったT型フォードの模型ではなく紙でできたものだった。

「これはよくできているなあ。自分で作ったのかい？」

「はい。おじさんの模型と図面から型紙を作って自分で作りました」
「これは紙で作るのは難しいと思っやめておいたんだが、ひよつとしたらおじさんが作るよりもよくできているかも知れないよ」

「これだけじゃないんです。四年生みんなで作りました」

子供たちが一斉に手下げ袋の中からいろとりどりのT型フォードの模型を取り出した。

「ありがとう。これはいいな。まるで虹みたいだ。おじさんよりも隆一君のほうがT型フォードのことをよくわかってるかもしれないね」

「おじさんが退院したら相談しなさいっていわれてます」

「そうだ。実はね、あの紙の模型の型紙をまとめ一冊の本にするっていう計画があるんだ。その中にこのT型フォードの型紙をいれ

ておくというのはどうだろう」

「そうだったらいいな」

「本は斉藤おじさんと迫田隆一君の共同作品ということにしないか」
「はい」

迫田少年はうれしそうに答えた。

「しかしどうしようか。全部置くと部屋が狭くなって看護婦さんにしかられちゃうかも知れない。そうだ。この病院には小児科の病棟もあるんだ。入院している子供たちに半分だけあげてもいいかい？」
「はい。いいです」

子供たちが帰ってから、模型の半分を小児科病棟に分けてもらい、あとの半分を縦に糸でつないで看護婦に天井から下げてもらった。T型フオードの虹だ。迫田少年との約束を果たすには、滅多なことでは死ねないぞ。そう考えて初めて生きたいという思いがわいてきた。